

シリーズ

近刊本の紹介

樹木医 富塚武邦

1. 昆虫擬態の観察日記 2008 海野和夫

技術評論社 1680 円

3000 万種とも言われる地球最大の生物群、昆虫の巧みな生き方、擬態についての観察書であり、地球の底知れぬ懐の深さ、大きさを感ずる。目立ちたくないためのカムフラージュ、目立ちたいための擬態、さらに擬死や威嚇についての解説も分かりやすく、写真も楽しい。この特殊な擬態という形質を獲得し進化させてきた知恵と強^{した}かさに改めて脱帽する。強者と思われたカマキリの捕食者を欺くカムフラージュ、また捕食するための擬態も面白い。そして昆虫世界では極めて少数派の彼らの生命が、永遠に輝く地球環境を願うものである。

2. 遺しておきたい伝えたい千葉の水辺（自然・景観・土木遺産） 2009

千葉河川交流会（連絡先 松尾弘道）

先人の知恵と努力の結晶である多くの水辺の施設が、いま歴史的意義を含め忘れ去られようとしている。本書は時代背景やその意義に光を当て、つくられた時代と現在の状況を正確に伝えるべくまとめられた貴重な記録書であり、調査に携わった人たちの使命感が伝わってくる。古くは樅海干拓から最近の銚子大橋の交代まで、白亜紀の地層に立つ白亜の銚子灯台、千葉の高架水槽、小櫃川・養老川の川廻し等、30 の施設が紹介されている。写真や図も往時やいまを語っている。続編も期待したい。

3. 地元学からの出発 地域の再生① 2009

結城登美雄 芸文協 2600 円

もう一度この土地に生きてきた人々の声に

耳を傾け、その発見の中から自分もまた地域を再生する一人の当事者として力を合流させたいと著者はいう。そして古老の一番大切なものは良い仲間がいることとの言葉が重い。経済性一辺倒よりも人々の生きることへのひたむきさ、絆の強さ、土地への愛情が心を打ち、課題は多いが地域の明日は案外捨てたものではなく、曙光も射しているように思えた。

4. 今さら聞けない科学の常識 2 2009

朝日新聞科学グループ編 講談社 900 円

私たちは意外と根本的なところが分かっていないことが多い。特に自分の得意と思っている部分で的確に答えることの難しさを経験された人は多いと思う。ここで取り上げた自然・環境、地球・気象など 7 分野、81 項目はそうした疑問に答え、系統的に分かりやすく、しかも面白く解説している。i P S 細胞の i の小文字の意味は研究者の茶目っ気あふれる命名によるもの、単子葉植物は双子葉系統樹の中にすっぽり収まること等、興味が尽きない。1 集と合わせて活用したい。

5. 木々の恵み 2009 フレッド・ハーゲネー

ダー 玉置悟訳 毎日新聞社 2900 円

人間は太古から樹木と深くかかわりあい、火を使うことを覚え、火は文明を築く原動力となったが、それは木の存在なしには起こり得なかったと語り、さらに物質的な面ばかりではなく、深く精神的にも支えられていることを歴史、文化、神話、宗教、癒し効果等から解説している。広範な文学書のように、著者の樹木への愛情、畏敬の念にあふれた文章からは、樹木の魅力と沢山の恵みが伝わってくる。写真も良い。但し植物学的な記述では考証の要がある。